

話し手の間接判断から聞き手配慮伝達へ

— “想” の分析を通して —

黄琬婷(HUANG Wanting)

大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻

lcv134kw@ecs.cmc.osaka-u.ac.jp

現代中国語のモダリティ研究については、研究者により解釈が異なっているが、その機能は、主に「話し手の命題内容に対する捉え方」と、「話し手の聞き手に対する伝達の仕方」とに分けることができるだろう。そして、この2つの機能は異なる表現で区別されている。ここでは、便宜的に「命題内容に対する捉え方」を M1 と称し、「聞き手に対する伝達の仕方」を M2 と称する。このような分類法で、様々なモダリティ表現の機能が明確に分けられているといえる。また、この分類法においては2つの機能の間には関連がないように見える。しかしながら、実際の談話において、同一の表現に M1 と M2 の2つの機能を持つ現象が観察される。M1 と M2 の関係が一体どのようなものなのかについては、さらに詳細な考察が必要であると考えられる。

本稿では、M1 と M2 との関係を明らかにするために、「M1 から M2 への連続性」という仮説を提示する。分析に当たって、知覚動詞“想”を分析の対象とする。分析内容において、“想”には M1（命題内容に対する捉え方）と M2（聞き手に対する伝達の仕方）の2つの機能があるという前提に立ち、まず M1 の“想”の基本的意味を明らかにする。また、M2 の“想”は M1 の“想”の基本的意味が拡張されたものであることを明確にし、両者の間には意味的な連続があることを提示する。そして、この考察結果は「M1 から M2 への連続性」を証明するものであると考えられる。

キーワード：機能、命題、伝達、“想”、連続性